
似者語

楼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

似者語

【Nコード】

N3270P

【作者名】

楼

【あらすじ】

緑間真太郎の双子の弟が、誠凛高校に入学しました。

注意：作者は原作を流し読み程度にしか読んでいません。wiki等を参考にしたりしていますが、それが嫌な人は読まない方が良いかもしれません。

prologue (前書き)

注意はあらすじの通りです。

処女作なので、至らぬ点多々あると思いますが、ご容赦ください。

prologue

皆さんは、「キセキの世代」という言葉を一度耳にしたことがあるだろうか。

「キセキの世代」とは、帝光中学校バスケットボール部の歴史の中で最強といわれる5人の天才達のことだ。知っているのならば、幻の6人目の噂も聞いたことがあるだろう。

しかし、その天才達が活躍している頃にベンチ入りしていた人物を知るものは少ない。

帝光中学は元々強豪校である。ベンチ入りしていた人達だって相応な強さを持つているはずだ。

だから帝光中学は2軍でも強い。

そして、天才はベンチ入りの人達の中にもいたのだ。

…それも、「キセキの世代」と並び会える強さを持った奴が。誰もが見たことがある、しかし誰も正体に気が付かない。

容姿が似すぎていて、誰も見分けが付いていなかったのだ。

それが彼、 緑間翔太郎。

「キセキの世代」が一人、緑間真太郎の双子の弟である。

1・01 「久しぶり」

桜の花びらが散り、風に舞っている。

少し涼しいが、ブレザーを着ているので丁度いいくらいだ。

季節は春。そう、入学式なのである。

僕は誠凛高校の門の入ってすぐの所にいた。

早く行つててバスケット部に入部届出しに行こうと思うのだが、中はとても混雑している。進めないのだ。

人より長身なので、周りによく見えるのだが進めなければ意味はない。

「緑間君、お久しぶりです」

急に声が聞こえた。この声は…黒子？

何故ここにいるんだ？

そう思いつつも、視線を下に向ける いない。

右にも左にも いない。

あれ、どこにいるんだ。

「ここです、緑間君」

声が聞こえた方に目を向ける。真っ正面 いた。

こんなに近くにいたとは…。

「久しぶり」

とりあえず返事をする。

相変わらず感情のこもっていない声だと、自分でも思う。

よく言われるのだ。もっと感情を出せ、と。自分で出そうとする

けれど、表になかなか出てこない。

こう言つところでは、真とは逆だ。

黒子は恐らく意図して表情を出していないのだろう。

「はい。… 緑間君？どうかしたのですか」

少し考えすぎてしまったらしい。僕は何でもないと答えた。

「ところで緑間君。こんなところで何をしているんですか」

「入っていけなかった。黒子、一緒に行く？」

一人で行くよりは二人で行った方が、話し相手にもなるしいいか
と思い、誘った。

でも、黒子は僕なんかと行くより一人で行った方が効率が良いの
か。

「はい、いいですよ」

黒子にはっこりとした雰囲気で答えてくれた。

悪いなと思っていたので、僕は少しほっとした。

バスケ部を探すためにきよろきよろしていると、肩をたたかれた。
何だろうと思い振り向いてみると、女の人がいた。

「ねえ、君！陸上興味ない？その足の長さだったらすぐに大会にも
出られるようになるんじゃないかな」

「いえ…」

「いや、君にはラグビーの方が向いているよ！是非うちの部活入ってよ！」

「あ、え」

ろくに返事もできないうちに、次から次へと勧誘の声がかかる。スポーツのほとんどは、身長が高い方が有利だ。

僕は先にも述べたように長身であるので勧誘の声がかかり易いのだ。

そんな人達をやんわりと退けながら、進んでゆく。

僕は、人混みはあまり得意ではない。

なのでだんだん、酔ってきたらしい。気持ち悪い。

「大丈夫ですか？顔色が悪いですよ」

「ごめん黒子。酔った。僕ちょっと抜けるから入部届けお願いしても良い？」

「はい、わかりました」

ありがとうと礼を言い、入部届に何を書くか分からないので、とりあえず事前に渡されていた生徒手帳を黒子に預け、待ち合わせ場所を決めて僕は人の少ない方へと向かった。

そしてクラス分けを見て、黒子と玄関で落ち合った。
黒子とは同じクラスだ。

1・02 「緑間です」

翌日。

今日は4時間だがバスケ部は早速放課後に集まりがあるらしい。今、同じクラスだった黒子とバスケ部の活動場所である体育館へ向かっている。

「そういえば緑間君はどうして誠凛にはいったんですか」

改めて聞かれると、自分は何故この高校を選んだのか分からない。一応、進学校だったからという理由もあるが、特にこれといった明確な理由はない。ただなんとなく良いなあと思っただけだった気がする。

真は学校選びも尽くせる人事と言って最初は反対したが、僕が『なんとなくここが良いな』と思ったのは神のお導きかもしれない』というところとあっさり承諾した。

神のお導きは大事にするべしと思っているのでここにした、それが本当のところではあるが面倒なので、黒子には、

「なんとなく」

と答えておいた。

「そうなんですか」

黒子は多少驚いているようだった。凄くわかりにくい。

「よし、全員そろったな。一年はそっちな」

先輩に指示された方に、僕も動く。

昨日直接入部届を出しに行けなかったので挨拶ぐらいはしておこうかと思ったが、タイミングを逃した。

とりあえず僕は黒子の隣にすることにした。

「男子バスケット部カントク、相田リコです。よろしく」

“ええー！！”という声が横から聞こえてくるが、確かにという感じだ。

あそこにいる顧問の先生は、バスケット部の監督には見えない。

「……じゃあまずは、シャツを脱げ」

またしても横から“ええー！！”という声が聞こえる。しかもさつきよりも煩い。

僕は逆らう気も意味も無いので、とりあえずシャツを脱いだ。う、ちよつと寒い。

監督は端から順に体つきを見ているらしい。

何が分かるのかと思ったら、身体能力が数値で見えるらしい。

凄いな。

今は火神というやつの体を見てにやけている。

というか、目をきらきらさせてよだれまで垂らしている。

相当、良かったんだろうな。

あれ…？火神でラストとかいわれている。もしかして気付いてない？

僕も、黒子までとは言わない…というが無理だけど、影が薄いか言われてたからな。

黒子ほどじゃないけど。

さすがに近くにいたら気が付かれる。

「……黒子君と緑間君がこの中いる？」

ああやっぱり名乗り出た方が良いのか。

きつと黒子は俺の後だろうし。

てか、黒子もうシャツ着てる…。

「すみません、ここにいます」

「うわっ、背？っ。火神以上じゃないか？！」

眼鏡の先輩が言った。

ていうか、帝光のバスケ部だと黒子以外とはそこまでの差が無かったから、あまり意識してこなかったけど、ここのバスケ部の中では大きい方なのか。

「えっと…、どっち？」

「緑間です」

「緑間君ね、分かった。とりあえず見せてねー」

そついうと監督は僕の体をじーつと見つめてきた。

ん、改めてみられると少し恥ずかしいかもしれない。

…ちょっと長くないか？いつまで見てるんだろう。

「カントク！いつまで見てんだよ」

「ハッ、ごめん。ええと、君は体重軽すぎかな。もうちょいつけて」

「はい…」

ああ、また言われてしまった。努力はしているんだけどなあ。
これは帝光のレギュラーになれなかった原因の一つだ。
面と向かって言われると、ちょっと悲しい。
でもどうしよう。ご飯、食べ過ぎると吐くんだよなあ。

「あとは、黒子君いるー？」

監督の目の前にいるんだけどな、黒子。

あれで気付かれないとはさすがだ。

「今日は休みたいね。いーよ、じゃあ練習始めよう！」

「あの…、すみません」

あ、やっとか。

黒子が出てきた。

「黒子はボクです」

「きゃあああ！？」

案の定、監督に驚かれてる。

いきなり目の前に人が現れたら、誰しもビクリすると思う。

「うわぁ、なに？」

「……うおっ！？ダレ？いつからいたの！？」

「最初からいました」

「ウソオ！！？」

僕はともかく、黒子は本物だよな。

さっきも言ったけど、本当にさすがだ。

「ってことはつまり、こいつらが『キセキの世代』だった奴ら！？」

「まさかレギュラーじゃ……」

「それはねーだろ。ねえ、黒子君、緑間君」

あるのが黒子だよな。気付かれないけど。

僕はたまに出るくらいだが。

「……？試合には出てましたけど……」

「僕は基本ベンチで、たまに出てました」

「だよなー……うん？」

「え？……え！？」

「え、え、ええ〜」

先輩や同級生達は凄く驚いている。

僕は真が出てるから、見た目的にはあり得るかもしれないけど、黒子はそうは見えないからな。

「ちよっ…シャツ脱いで」

黒子の身体能力を見ても、きっとしょうがないだろうな。

あいつは、身体能力は全然といって良いほど駄目だ。

監督は黒子の体を見ると、考えるような顔をした。

黒子の試合を見ないうちは、黒子のすごさは分かるはずがない。いや、勘のいい人なら分かるかもしれない。黒子の特異性が。

その後は基礎練をやり、解散となった。

黒子と帰ろうとも思ったが、遅くなると真に心配を掛けるかもしれないから、僕は一人で家に帰ることにした。

「ただいま」

「お帰りなのだよ」

その返事をしたのは真だ。僕たちの両親は多忙で、滅多に家へは帰ってこないから実質二人で生活している。結構広めな一軒家なのにもったいないな、いつも思う。

自分とほとんど同じ顔が出迎えてくれるとは、さすがに慣れたけど変な感じだ。

僕たちはとっても似てると言われ、見分けることができる人は少ない。

でも、注意してみると分かる。真は指にテーピングしてるし、体型だって、身長はほとんど同じだが体重は？も違う。細い方が僕だ。

…なんか、細いのは分かってるけど自分で言うとなおさら悲しい。

「真、早いな。部活無かった？」

この家は、2つの学校の丁度真ん中にあるから、帰宅する時間は余り変わらないはずだ。

入学式の日なんかは、同じくらいに終わったのか駅で会った。

「部活はミーティングだけで練習は無かったのだよ。

…ご飯用意できてる。食べるか？」

僕はそれに肯き、礼を言った。

僕たちのルールでは、先に帰ってきた人が夕食当番をすることになっている（勿論、もう片方も帰ってきたら手伝うが）。そして、一緒に食べる事もルールの一つだ。

…きつと今日は待たせてしまっただろう。

着替えてきてからご飯を食べ始める。

真の料理はやっぱり好きだ。自分と好き嫌いが一緒と言うこともあり、味付けは真のが一番だし、その上栄養とかも、よく考えてくれている。僕が小食だからあまり食べられないこともきちんと計算に入れて、だ。

少しでも多く食べられるようになるようにと、多めに…といったも普通よりはかなり少ないのだが、いれてくれるので、いつも残してしまう。真の普通なので、他の人は分らないが、帝光中のキセ

キのみんなもそのくらいなので、育ち盛りの男は、きっとみんな真くらい食べるのだろう。しかし、それでも以前よりは多くなっているのだ。

ゆっくり咀嚼して飲み込む。

小さい頃は、これをしなければならぬ食事が一番嫌いな時間だった。それでも食べていたのは、真がいたからだろうと思う。本当に真は偉大だ。

そんなことを考えているうちに、真は食べ終わっていた。僕の小食は胃腸が人より弱いというのも原因の一つであり、あまり一気に食べるとおなかを壊すので、食べるのが遅くなるのだ。

僕も限界に近づいてきた。

「ごめん、真。おなかいっぱいだ」

「謝ることはないのだよ、翔。体質の問題だからな」

そういつて真は、僕の食べ残しを食べ始める。

本当に真には頭が上がらない。

1・03 「落ち着いてください」

今日は雨が降っていた。

そのせいでロードが出来なくなり、余った時間は一年対二年で、ミニゲームをやることになった。

そういえば、この学校の体育館の床の感じと、帝光中の体育館の床の感じはやはり少し違う。

他の人は、どこが？と言うかも知れないし、帝光中にいた頃、他の体育館に行ったときにこれを言ったら実際そう言われたが、僕の中では床の感じの違いは重要なことだ。

それによって踏み切り具合も、力の入れ具合も、少しずつ変わってくる…と思う。

今日はこの体育館での初の試合だが、床がだいたいどんな感じがつかめたし、大丈夫だろう。

試合開始の挨拶をし、一年の攻撃で試合は開始した。

そして直ぐ。ボールは火神に渡り、ダンク。周りは感嘆の声を漏らしていた。

確かに凄い。ジャンプが高く、もしかしたら真ぐらいはあるかも知れない。

真はダンクしないから、その比較は出来ないが。

火神の活躍のおかげで、一年チームは11-8とリードしていた。しかし、黒子はまだ力を発揮できていない。黒子はあれ以外は駄目だからな。

火神はそんな黒子にいらしているようだ。

“火神止まんねー”という声が聞こえたが、いよいよ先輩達も力を出してきた。

火神に三人ものマークをつけたのだ。

すると試合の流れは逆転、15 - 31と一気に差が付き、そう
なると勿論、士気は下がっていく。

「もういいよ」

そんな声も聞こえる。

しかし火神はあきらめず、相手に突っかかっていった。

「……もういいって……なんだそれオイ!!」

「落ち着いてください」

熱くなっていた火神に、黒子の膝がつくんが華麗に決まる。

いや、あれは見事だ。

何か言い合っている。何て言っているかまでは、よく聞いてい
ないので分からない。
分かるのは、

「すみません、適当にパスください」

黒子のスイッチが入ったことくらいだ。

黒子の本領発揮だ。

『いつの間にかにパスが通っている』、黒子知らない人にはこ
う見えるのだろう。

その黒子の技能、“ミスディレクション”によって、再び流れは
一年に。

先輩達も混乱している。ついに36 - 37まで追い詰めた。一点
差だ。

しかし、残り時間は少なく、ボールがあるのは自陣のスリーポイ

ントラインの内側。

黒子にボールが回り、ゴールへ走る。そのままシュートかと思っただろう。が、回ってきたのは黒子の後ろ、センターラインの近くにいる僕の所だ。

何故わざわざこんな所にいる僕に回したか、みんなは疑問だろう。

黒子は、より確実な方を選んだのだ。近くにいる火神に回さなかったのは何故か知らないが、一度もシュートしていない僕に気を利かせてくれていたのかも知れないし、どうせなら3ポイント入れた方がいいと思っただのかも知れない。とりあえず、黒子は知っている。僕は、フォームさえ崩されなければゴールを決められることを。僕の周りに邪魔をする人がいない今は、絶好のチャンスだ。

僕はボールを受け取り、そのまま体全体を使うように意識して放つ。

それは綺麗な弧を描いて飛んでいく。滞空時間が長いのがこのシュートの特徴であるので、まるで時間がゆっくりになったように感じ、さっきまでの喧噪がぴたりとやんだ頃、すんと、とそれがネットの真ん中に落ちた。

「はいっ…た?!」

黒子以外の人が、目を見開いて驚いていた。

まあ、センターラインからゴールを狙う奴なんてほとんどいないからな。それこそ、真と僕くらいかも知れないし、驚くのは当然かなと思う。

その誰かの声を引き金に、静かだった体育館は一気に盛り上がった。

「うわあああ!!」

「一年チームが勝ったあ!!?」

先輩達も苦笑いしていた。

まさか一年に負けるとは思ってなかったのだろう。

「さすが緑間君ですね」

「ん、ありがとう。黒子のパスのおかげだ」

「そう言ってもらえると嬉しいです」

そう言いあっていると、監督がやってきた。

「ねえ、緑間君。君本当にレギュラーじゃ無かったの？」

違います、と僕は返した。

大方、さっきのシュートを見て、緑間という名字を思い出し、監督はキセキの世代にこんな奴いなかったっけと思ったのだろう。

レギュラーは双子の兄の方だし、しょうがないと思う。

「キセキの世代No.1シューター」、確か緑間って名前だったよね」

「そうですよ。僕の双子の兄、緑間真太郎は確かにそう呼ばれています」

“ええ?!”というみんな　と言っても当然黒子以外の声が、と体育館中に響いた。

…双子ってことにそんな驚くか？

「双子かあ、確かに顔がそっくりだったかも知れない…」

「見分けるのが困難なくらい似ていますよ」

黒子が言った。困難とはよく言われる。服装だって二人で一緒のものだったりするしな。選ぶのが面倒くさい、ただそれだけの理由であつて、決しておそろいのものじゃないと嫌というわけではない。

今日の練習はここで終わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3270p/>

似者語

2011年8月18日23時18分発行